晃とクロ　～動物達の戦い～

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晃とクロ　～動物達の戦い～

【Ｎコード】
Ｎ３２７１Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
喋る動物が噂になっていた。いきなりそれに出会うととんでもないことがわかり。現代ファンタジーです。

第一章

晃とクロ　～動物達の戦い～

この頃街に変な噂が流行っている。何でも動物が人間の言葉を話すというのだ。

「三組の上原も聞いたそうだぜ」

クラスでもその話題でもちきりだった。休み時間になると皆その話でヒソヒソと顔を合わせていた。

「猫が人間の言葉を話すってよ」

「それ本当！？」

女の子達がそれを聞いて今話した男子生徒に尋ねる。

「ああ、本当らしい」

その男子生徒はさも自分が見て来たような態度で語る。

「壁の上にいる猫がさ、話したらしいんだ。何処へ行くんだってな」

「うわっ、本当だったんだ」

自分が見たわけでも聞いたわけでもないのにこう言う。話を聞く方も何か自分の様に感じているみたいだった。

「それでその猫はどうなったの？」

「そのままプイッてどっか行っちゃったらしいんだ」

男子生徒は語る。

「何でもやたら大きな黒猫らしいけれど。まだこの街にいるかもな」

「気持ち悪いわね」

「そうよねえ、人間の言葉を話す猫なんて」

「動物を見たら気をつけようぜ。うちの犬だって不意に言葉を話すかも知れないしな」

「そうね」

「うちのハムスターにも気をつけなくちゃ。人間の言葉を話すなんて気味がわるいわ」

そんな話ばかり学校で流行っていた。もう漫画やゲームの話は一

切なく、動物が話すだの話さないだのそうした話ばかりになっていた。そしてこれは生徒だけではなかった。
「また出たそうですな」
「どうやらそうみたいで」
教師達もそれは同じだった。職員室でも生徒指導よりもその話ばかりで授業中でもそれは出る。犬が話しただの烏が話しただのばかりだ。そして家でも親がその話をする。
「雀が話をしていたらしいわよ」
「鯉もらしいな」
とにかく何でもかんでも人間の言葉を話すという。それだけ沢山の生物が話しているのを見たり聞いたりしていれば絶対に誰かそれをテープレコーダーか何かに録音している筈だがそれはなかった。これが非常に不思議なことであった。
「じゃあ何で誰も直接見たり聞いたりしていないんだよ」
それを不思議に思う少年がいた。この中学校の四組にいる国本晃であった。彼はサッカー部に所属するごく普通の少年であった。サッカー少年らしく日に焼けて明るい顔をしている。髪は短く切って黒いままである。みなりも学校の成績も特に変わりのないごく普通の少年であった。
彼はこうした話に対して眉に唾をつけていた。これだけ一杯話が出ているのに実際に会った人間はいないからだ。その三組の上原にしても二組の宮脇に聞いたという。結局誰が噂のもとなのかわからない程なのだ。先生にしろそれは同じで藤熊先生に聞いただの山崎先生に聞いただのだ。誰が見たのかさえわかりはしなかった。
「噂話なんだろ、結局は」
晃はそう思っていた。だからこの話を白けた顔で聞いていた。どうせすぐに消えてまた別の話題に移っていく。そう思っていた。
その日もそうだった。彼は部活を終えて自転車で家に帰っていた。その途中ふと声がしたのだ。
「なあ」

「！？」
最初は同じ部活の誰かが呼び止めたのだと思った。
「なあって」
また声がした。思わず自転車を止めた。
「誰なんだよ、一体」
もう辺りは暗くなりはじめている。彼はその中で周りを見回した。
「誰もいないじゃないか」
「いるよ」
けれどまた声がした。
「いるって何処にだよ」
やはり誰もいない。家と灯りが見えるだけだった。もう段々寒くなってきていた。出来ることならこのまま帰りたかった。
「だからここだって」
声は下の方から聞こえてきていた。そしてそこには一匹の黒猫がいた。
「ここだって」
「俺だよ」
その時黒猫がしゃべった。
「俺が呼んでたんだよ」
「呼んでたって」
その黒猫を見て晃の顔が段々強張ってきた。
「まさか、なあ」
にわかには信じたくはなかった。今までそれを頭から否定してきたのだから。
「そのまさかだよ」
だが黒猫はまた言った。
「俺はな、しゃべれるんだよ」
「嘘つけ」
それでも彼はそれを必死に否定しようとした。
「これは夢だろ」

「夢なんかじゃねえよ」
黒猫はそれを否定した。
「夢だったらほっぺたをつねってみな。よくわかるから」
「わかったよ。それじゃあ」
それで実際につねってみた。すると痛かった。
「どうだい？わかったかい？」
「ああ」
認めるしかなかった。これは夢ではなかった。
「本当の話だったんだ」
「そうさ。話せる奴は俺の他にもいるぜ」
「犬や鼠も？」
「そうさ、烏や雀もな」
黒猫は言った。
「かなりの数の奴が話せるようになってるぜ」
「どうしてそんなことになったんだい？」
「知りたいか？」
「それはね」
晃は答えた。
「だって。普通動物が人間の言葉を話せるなんて有り得ないから」
「そうだよな。じゃあまあここじゃ何だから」
猫は辺りを見回してからまた言った。
「場所を変えようぜ。いいかい？」
晃は猫を自転車の籠に入れて出発した。そして自分の家に帰った。
「お帰りなさい」
すぐに母親が出迎えてくれた。
「あら、猫」
そして息子が猫を抱えているのに気付いた。
「どうしたのよ。拾って来たの？」
「うん」
晃は答えた。

「ちょっとね」
「その猫は話したりなんかしないわよね」
「まさか。そんなことあるわけないじゃないか」
本当のことなぞ言える筈もなかった。晃はここは黙っておくことにした。
「道で捨てられていたのを見つけたんだけれど。どうしようかな」
「そうね」
実は母は猫は嫌いではない。父もだ。むしろかなり好きな方である。去年までかなり年老いた猫を飼っており、それがいなくなって寂しい思いをしていた程である。
「丁度今いないしね」
「じゃあ飼っていい？」
「ええ。そのかわりちゃんと面倒見るのよ」
「うん」
こうして黒猫はすぐに家族に迎え入れられた。とりあえずは風呂に入れられその後で晃の部屋に入れられた。そして猫用のミルクを与えられていた。
部屋はごくありふれた中学生の部屋だった。勉強机にベッド、プレイステーション2、そして本や漫画、CDにゲームソフトが入れられた本棚。壁には女性アイドルグループのポスターにサッカー選手のサインが飾られている。特に何の変哲もない部屋だった。今ここに人間の言葉を話す猫がいる以外は。
「悪いな、飼ってもらえるなんてよ」
猫はミルクを舐めながら言う。
「話すだけだと思ったのに」
「どうせ野良猫だったんだろう？」
「まあな」
黒猫は顔を上げてそれに答える。
「生まれてからな。ずっとこの街にいたけれどな」
「どれ位？」

「まだ一年も経っちゃいないか。まあそんなところだ」
「じゃあ猫の年齢で言うと二十歳位？」
「そうだな。まあ御前さんよりは年上になるな」
猫は一年で成年になる。子猫から急に大きくなるものなのである。
「じゃあお兄さんか」
「歳のことなんていいさ。どっちみち人間と猫じゃ比べ物にならないし」
「それもそうだね」
「で、話だけどな」
猫は道での話に戻ることにした。
「俺が話せるようになったわけだがな」
「やっぱり何かあるんだね」
「そうさ。実はな、食べたんだよ」
「何を？」
「脳味噌をさ」
猫は言った。それを聞いて晃の顔にさっと不吉なものが走った。
「脳味噌って」
「人間の脳味噌をな。食べたんだよ」
「えっ」
それを聞いて思い切り引いた。顔が青くなる。
「人間のって」
「街の外れの寺でな。もらったんだよ」
「街の外れの」
もう潰れかけの古い寺だ。年老いた住職が一人いるだけだ。最近では殆ど姿を見せないし人も来ない。時折肝試しにも使われるような場所である。お化け屋敷の様に街では言われている。
「あそこに」
「あそこはな、まだ土葬なんだよ」
猫は言う。
「それで脳味噌もな。残るんだよ」

「まさか」
だが晃はその言葉を否定した。
「そんなこと。それにまだ土葬なんて」
「わかっちゃいないな。確かに昔に比べて減ったらしいけれどな」
猫は晃に説明した。
「まだ残ってる場所もあるんだよ。火葬じゃない墓も結構残ってるんだぜ」
「そうだったの」
「その死体からな。脳味噌を拝借するんだよ」
猫の顔が無気味なものに見えてきた。まるで化け猫のそれの様に。
「それを食べるとな。こうして話せるようになるんだ」
「人間の言葉をだね」
「そうさ。驚いたかい？」
「驚くも何も信じられないよ」
晃は眉を顰めてこう返した。

第二章

「猫が人間の言葉を話せるなんて。しかも脳味噌を食べて」
「脳ってのはな、不思議な力があるんだ」
猫は語る。
「食べるとその力を授かるんだ。これは人間にだってそうだって言われてるだろ」
「そうなの」
「ほら、人が人を食う話ってあるだろ」
「知らないよ、そんなの」
晃は憮然として言う。
「人間が人間を食べるなんて。頭がおかしいよ」
「けれどな、昔は普通だったんだぜ」
猫はその話を信じようとしない晃に対して説明した。
「結構な。食い物がない時とかな」
「そうだったの」
猫の言ったことは真実であった。かっては飢饉の時等に弱った者や死体の肉を食べて生き抜いたのである。こうした陰惨な歴史も各地に残っているのは事実である。
「大概は飢え死にしない為に最低限のことだったのさ。けれどな」
「そうじゃない場合もあったんだね」
「そうさ。ほら、生き胆ってあるだろ」
「鬼が食べるあれだね」
「そうそう、あれを人間が食べる場合もあるんだ」
「どうして？」
「その生き胆の持ち主の力を身に着ける為さ。これも昔あった話なんだ」
かって薩摩では敵の勇猛な者の肝を食っていた。これはその者の力を手に入れる為だ。こうした話は中国や他の国にも残っている。

多分に儀式的な要素が残っている。
「脳味噌もそれと同じさ」
「そうだったの」
「そして人間の脳味噌を食べて俺はしゃべれるようになったんだ」
「人間を食べたんだね」
晃は薄気味悪そうな目で猫を見ながら言った。
「気持ち悪いなあ」
「まあ知らなかったこととは言えな」
猫は言った。
「食べちまったのは事実さ。それに美味くはなかったな」
一説によると人の肉は美味しくはないらしい。誰かが牛と豚を会わせた様な味がすると言っていた。別の者が筋張っていると言い、他にはアンモニアが強いとも言われている。無論本当のことは誰も知りはしないがこうした話が残っている。もっとも中には美味いという話もある。どちらにしろ多くの者は食べたいとは思わないであろうからそれに関しては殆どの者が知りはしない。知っていれば大変なことであろう。
「そういう問題じゃないよ」
だが晃はこう言い返した。
「どっちにしろ食べたんだから」
「安心しな、何も人を食べたいなんて言わないからさ」
「当然だよ」
口を尖らし、腕を組んで言う。見ればまだ着替えてもいない。上だけ脱いで学生服のズボンのままであった。あまりのことなので着替える余裕すらなかったのだ。
「そんなこと考えただけでも家から追い出すからね」
「だからそれはないって」
猫は晃を宥めて言う。
「何でそんなこと考えなくちゃならないんだよ、俺が」
「どうだか」

「いいかい、よく聞けよ」
猫はここで言った。
「俺はな、ごく普通の猫なんだよ」
「人間の言葉を話すけれどね」
「だからそれを除いたら普通の猫なんだよ。それにこれだってあの住職さんに気付かないうちに食わされたんだよ」
「その住職さんだけどさ」
晃は尋ねた。
「どうして君達に脳味噌なんて食べさせたの？それも人間の」
「今言っただろ、力をつける為だよ」
「力を」
「ああ。この場合は知識かな」
猫は言った。
「脳味噌を食べるとな、知識がつくんだよ」
「そうなの」
「俺だって人間の言葉を話せるようになったしな。これが何よりの証拠じゃないか」
「認めたくないけれどね」
「まあまあ。どうも住職さんは色々と知りたがっているんだよ」
「何をだよ」
「知識ってやつをさ」
「そんなの勉強すればすぐにわかるじゃないか」
「ところがそうじゃないのさ」
猫はそれを否定する。
「勉強しても身に着くものなんてさ。たかが知れてるのさ」
「まさか」
晃はそれは信じられなかった。
「何でも勉強すればわかるじゃないか」
「そりゃ学校の勉強はね」
猫はまた言った。

「勉強すればわかるようになるさ。あんなの教科書丸覚えでいいじゃないか」
「簡単に言ってくれるね」
普通位の成績の彼にとってはそう言い返したくなる言葉だった。
「猫が人間の言葉話すのよりはましだろ」
「だからそれは普通有り得ないんだって」
「その有り得ないことを身に着ける為なんだよ」
「その為に脳味噌を？」
「そうさ。住職さんはとにかく何でも知りたがっているんだ」
猫は説明する。
「何でもね。その為には手段を選ばない」
「それで脳味噌を食べるんだね」
「そういうことさ。で、俺達はその実験にされたってわけ」
「本当に知識が身に着くかどうか」
「で、身に着いたと。言葉も話せるし」
「やっとわかったよ」
晃は憮然としながらそれに応えた。
「何で君が話せるのかね」
「御理解頂いたようで」
「最初は化け猫かと思ったよ。どうしてやろうかと」
「おいおい、物騒だなあ」
「当然だろ、それに黒猫だし」
晃は言う。
「あからさまに怪しいじゃないか。それで怪しくないって言えるの？」
「俺はそうは思わないよ」
「君が自分でどう思おうかなんて関係なのの。大事なのは僕や周りがどう思うかってことなんだよ」
「で、俺は怪しいってことだね」
「そうさ。人前で話したら駄目だよ」

「ちぇっ、面白くないなあ」
猫はそれを言われて顔を顰めさせた。
「折角人をからかって楽しんでたのに」
「じゃあ最近街で噂になってたのは」
「そうさ、俺がやったんだ」
胸を張ってこう言った。
「流石にあれは驚いたみたいだぜ」
そして誇らしげに告白する。
「猫がしゃべるなんて思いも寄らなかったらしいからな」
「威張れることか」
「痛っ」
だが晃に頭をぴしっとはたかれてしまった。思わず前足で頭を押さえる。
「何するんだよ」
「怒らない筈ないだよ」
晃は言い返す。
「そんなことして。何考えてるんだよ」
「何って面白いじゃないか」
それが猫の言い分であった。
「人を驚かせるのなんてさ。慌ててさ」
「悪趣味だね」
「それが猫ってやつなんだよ」
全ての猫がそうなのかはわからないが少なくともこの猫がかなり意地の悪い性格をしていることは事実であるようだ。

第三章

「人を驚かせるのが趣味なんだよ」
「そんなの聞いたことないね」
「まあまあ」
「今度やったら本当に霊媒師のところに連れて行くからね」
「まあそっちとは関係ないから無駄だけれどな」
「じゃあ三味線屋」
「っておい、言うにこと欠いてそれかよ」
三味線という言葉を聞くと急に声をあげてきた。
「言っていいことと悪いことがあるだろ」
「じゃあそんなことするなよ」
「ちぇっ、厳しいなあ」
まだ不満はたらたらだったがとりあえず納得することにした。三味線まで出されては納得するしかなかった。それが猫の弱味であった。
「大体まだ三味線屋なんてあんのかよ」
「何か言った？」
「何にもねえよ」
晃の方が一枚上であった。何はともあれこの黒猫は晃の家に飼われることとなった。名前はクロと名付けられた。
「安直な名前だな、それにしても」
「じゃあ何がいいんだよ」
「そう言われるとこれと言って思いつかないな」
不平は人間並なクロであった。だが晃はそのクロから何かと話を聞くこととなった。
「その住職さんだけどな」
「うん」
晃は学校から戻るとクロの話を聞くようになった。彼は街の隅か

ら隅まで知っており何かと知っているのだ。
「最初は凄く真面目な人だったらしいんだ」
「そんな人が何故」
「真面目な人程ってやつさ」
クロは言った。
「何かを求めて、それが極端にいき易いのさ」
「つまり何でも知りたいと思ってそんなことをしてるんだね」
「そうさ。あの寺を見に行けばいいさ。夜中にな」
「とんでもないことしてるんだね」
「墓を掘り起こしてな。そこから死体を暴いて」
「ああ、もう聞きたくない」
クロが何を言うのかわかった。
「それでそこから死体の頭を割って脳味噌をすすってるんだろ」
「よくわかったな」
「ホラー映画の定番だよ。そういうの苦手なんだ」
「何だよ、苦手なのかよ」
「実際にそんなの見て平気な人もいないと思うけれど？」
「まあそうだな」
それには納得した。
「俺も見ていて気分のいいものじゃなかったし」
「だろ？誰だってそうさ」
晃は口を尖らせていた。
「本当の話だってことすら信じたくないのに」
「けれど本当のことなんだぜ」
「嫌だね、本当に」
「本当に嫌なのはこれからさ」
「今度は何？その内臓でも食べてるの？」
「それもあるけどな」
「やっぱり」
いい加減うんざりしてきた。

「けれどそれだけじゃないんだ」
クロは言う。
「その知識を使って何か悪いことを企んでいるらしいんだ」
「悪いことって？」
「最初はそうじゃなかったみたいだけれどな。ただ純粋に知識を手に入れたかっただけで」
「それでどうして悪いことを企むようになったんだい？」
「人間にだっていい奴と悪い奴がいるだろ？」
「うん」
「住職さんは悪い奴の脳味噌も食べたんだよ。それで」
「悪い奴の影響も受けたってことか」
「そういうこと。それで他にも運動神経がいい奴の力も身に着けたから」
「怖いものなしってことか」
「このまま放っておくと大変なことになるよ」
「だろうね」
「で、さ」
クロはここで言葉を一旦とぎって晃に尋ねてきた。
「これ聞いてどう思う？」
「どう思うって？」
「何とかしようとは思わないのかい？人の脳味噌を食べてそのうえ良からぬことを企んでいる住職さんの話を聞いてさ」
「そう言われてもね」
晃は特に何も思わないようであった。表情はこれといって変わらなかった。
「僕だけじゃ」
「このままだと町が大変なことになるぜ」
「具体的には？」
「俺達脳味噌を食べた奴の中には今の住職さんについてる奴もいるんだよ。悪い奴の脳味噌を食べてな」

「同じ穴の何とかってやつだね」
「まあ一言で言えばな。その連中が住職さんの指図で何かと動き回っているんだ」
「町を自分達のものにするつもりとか？」
「具体的に言うとな。まあそんなことを考えているんだと思う」
「若しそうなったら」
「当然俺も御前も唯じゃ済まないだろうな。若しかすると御前も脳味噌を」
「おいおい、止めてくれよ」
その話を聞いて気味が悪くならないと言えば嘘になる。
「そんな話」
「けれど今の住職さんだったらわからないぜ」
それでもクロは言った。
「人間の脳味噌食べるような人だからな」
それは御前もだろ、と思ったがとりあえずそれは黙っていた。そしてまた話を続けた。
「けれどさ」
「ああ」
「具体的にはどうすればいいのさ」
「俺に任せな」
クロは顔を上げてこう言った。
「俺に任せればいいから」
「任せればって」
「言ったろ？脳味噌を食べた動物がこの町には一杯いるって」
「うん」
「そりゃ悪い奴の脳味噌食べたのもいるけれどさ。そうじゃない奴もいるんだ」
「そうした動物を集めるんだね」
「そういうこと。けれどこれは内緒にしておきなよ」
「まあそうだね」

晃はそれには納得した。
「住職さんにわかったら大変なことになるしね」
「そういうこと。それじゃあ早速準備をはじめるか」
「今から？」
「思い立ったが吉日ってな」
クロはそう言いながら立ち上がった。そして大きく背伸びをする。
「それに今からはじめとかないとまずいしな」
「勉強みたいなこと言うね」
「残念だけれど勉強なんかめじゃない位やばいことだぜ」
クロはこう晃に対して忠告した。
「命の危険もあるしな」
「よくそんなのに普通の中学生を引っ張り込めるね」
「だってよ、一応は俺の飼い主なんだから」
クロは悪びれずに返す。
「当然だろ。これも拾った縁」
「拾ってもらった恩とかは考えないの？」
「恩！？まさか」
しかしクロは晃のそんな言葉をすぐに笑い飛ばした。
「猫に恩義なんてさ。求めるなよ」
「聞いた僕が馬鹿だったよ」
「じゃあな。ちょっと行って来るぜ」
「気をつけてね」
そんなやり取りの後でクロは窓から外に出た。そしてその日はそのまま帰っては来なかった。晃は暫く待っていたが何時まで経っても帰って来ず、これ以上待っても仕方ないと思いシャツとトランクスだけになってベッドに入った。そしてその中であれこれと考えていた。
「あんなこと言ってるけど」
やはり不安であった。
「そんな危ない人に。何をするつもりかなあ」

それを考えるだけで不安が増す。しかし今からあれこれと考えても仕方ないのでそのまま眠りに入った。その日はそれで終わりであった。

次の日学校での授業と部活を終えた後で家に帰った。部屋に入るとそこにはクロがいた。

「よお」

「帰ってたんだ」

「ああ、とりあえずやることはやって来たぜ」

クロは胸を張ってこう言った。

「やることって？」

「外を見てみな」

窓の方を指差して言う。

「これで。あの住職さんにも負けないと思うぜ」

「うわ」

窓の外の道や家の屋根、そして電線等に彼等がいた。

そこにいたのは大勢の動物達であった。クロと同じ猫だけではなく犬や鼠、狐、狸、蛇、そして烏や鳩、雀達までいた。

「この動物達は？」

「俺の同志さ」

クロは晃に顔を向けて言った。

「俺と同じく住職さんに脳味噌を食わされた連中さ。俺が一日かけて集めて来たんだ」

「こんなにいたんだ」

どれだけいるか一目ではわからない程である。かなりの数であるのは間違いなかった。

「そうさ。けれど住職さんの方にもいるんだ」

クロの言葉が鋭いものになった。

「それは覚えておいてくれよ」

「そっちの方はどれ位？」

「まあこっちの方が多いかな」

クロは少し考えてから言った。
「それも結構」
「じゃあ問題ないんじゃないの？」
「ところがそうも言ってばかりはいられないんだ」
「何で？」
「向こうには住職さんがいるから」
彼は答えた。
「言っただろ、住職さんは脳味噌を食べてるって」
「うん」
「それも何人も。だからもう化け物みたいになってるんだよ」
「化け物」
「今じゃ悪人とか元スポーツ選手とかの脳味噌や内臓まで食べているから。相当な力を持っているんだ」
「そんな人とやらなくちゃいけないんだね、僕達」
「そうさ、だからこそ気をつけなくちゃいけない」
「それでどうするの？」
「それを今から話したいんだけれど」
「わかったよ。それじゃ何処で？」
「ここじゃ駄目かな」
「入られると思う？」
晃はクロを見下ろして言った。

第四章

「無理だろうな」
「それじゃあ結局そこしかないよね」
「嫌なのかい？」
「あそこあんまり好きじゃないから」
晃は憮然とした顔で答えた。
「幽霊出るって言うし」
「あそこはそんなの出やしないよ」
クロはそれに対して笑って返した。
「マムシがいるだけでな」
「余計危なくない、それって」
「そのマムシも俺達の方にいるから。大丈夫だって」
「人間の言葉を話す蛇？嫌だなあ」
「そんなこと言ったら俺だってそうだぜ」
「だから嫌なんだって」
そうは言いながらもクロと一緒に部屋を出た。そしてその足で裏山に向かう。横と後ろ、そして上にはクロと同じく人の言葉を話せる動物達がひしめいていた。
「こいつか、クロ」
烏の中の一匹がクロに尋ねてきた。
「その人間ってのは」
「ああ、そうだよ」
クロはその烏に答えた。
「詳しいことはもう話したよ」
「大丈夫か、こいつで」
烏は晃をジロリと見ながら言った。
「如何にも頼りなさそうだけれどよ」
「おい、聞こえてるよ」

晃はその烏に言った。
「人間語で話してるからな。わかるよ」
「おっと、いけねえ」
烏はそれを聞いて思わず言葉を引っ込めた。
「そうか、言葉が人間のものになってるんだったな。いけねえいけねえ」
「随分な物言いだね、全く」
「まあ気にするな。あんたはまだ子供なんだからな」
烏は今さっきの自分の発言を誤魔化すかの様に返す。
「頼りなくても。仕方ないさ」
「とてもそう考えているふうには聞こえなかったけれど」
「おや、そうかな」
「調子がいいなあ。何か烏っていうよりも九官鳥みたいだ」
「呼んだかい？」
すると晃の右肩に別の黒い鳥がやって来た。
「おいらは元々人間の言葉がしゃべれたんだけれどね」
「九官鳥もいたのか」
「他にも結構いるぜ」
クロがそれに答えた。
「鳥だけじゃなくさっき言ったマムシとかな」
「うん」
「犬に俺と同じ猫も。鼠もいるぜ」
「本当に色々といるんだね」
「色々といた方が何かと助かると思うぜ」
「どうしてなんだい？」
「その方が色んなことができるからな。まあそこは俺達に任せてくれよ」
「僕はいるだけかな」
「いや、人間もいてくれた方がいい」
クロの声が険しくなった。

「相手が人間だからな」
「そういうものかな」
「人間にしかわからないこともあるんだ。その時は頼むぜ」
「うん、それじゃ」
そして裏山に着いた。晃と動物達は頂上に向かいそこの大きな木の下で話をはじめた。進行役はクロであり晃はその後ろでその大きな木の下に背をもたれかけさせ、胡坐をかいて話を聞いていた。
「皆いるよな」
「ああ」
白い犬がクロの言葉に答えた。
「皆いるぜ」
「とりあえず住職さんに悪い奴の脳味噌を食わされた奴以外はな」
「そうか、ならいいな」
クロはそれを聞いてまずは頷いた。
「じゃあ話をはじめるぜ」
「おう」
彼等は話をはじめた。それは人間語によるものであった。
「最近住職さんはどうしてる？」
クロはハムスターに尋ねた。
「今のところは大人しいよ」
ハムスターはクロにこう答えた。
「墓場は漁り続けてるけれどね」
「そうか、今は大人しいのか」
クロはそれを聞いてまずは頷いた。
「墓場を漁ってるってことはまたいらんことを覚えるんだろうけれどな」
「今のうちに何かしておくかい？」
シェパードが言ってきた。
「向こうに動きがないのならさ」
「いや、今は止めた方がいいぜ」

先程の烏がそのシェパードに言った。
「さっき住職さんのお寺の上通ったんだけれどな」
「ああ」
「警戒が半端じゃねえ。俺も同僚に襲われてえらい目に遭った」
「烏にか」
「他にも結構いたぜ、雀とかな」
「私の親戚かしら」
それを聞いた雀の中の一匹が困った顔を作る。
「かもな。あと下には犬とか猫もいたし。随分といたぜ」
「けれど数はこっちの方がずっと多いぜ」
シベリアン＝ハスキーがここで言った。
「数で一気に押し切れば」
「相手を見てそれ言える？」
だがそれを柴犬が否定した。
「あの住職さんよ。今じゃライフルまで持ってるそうよ」
「ライフル」
それを聞いたスコティッシュ＝ホールドが顔を青くさせた。
「そんなものまで持ってるの？」
「らしいわ。この前街で買ってたそうだし」
「それでも坊さんかよ」
「もう人間の脳味噌食べてる時点でまともな人間でもないわよ。だからそんなの持っていても平気なんでしょ」
「そんなものかね」
こっちに言わせればこうして動物が人間の言葉を話している方が不思議だよ、と晃は話を聞いて思っていたがそれは顔には出さなかった。そして黙ったまま話を聞いていた。
「ライフルか」
「どうすればいいかな、そんなもの持ってたら」
「当たると痛いよね」
「痛いどころか死ぬよ」

隼が皆に言った。
「下手しなくても」
「どうしようか、そんなのだと」
「困ったなあ」
「ライフルか」
晃はそれを聞いて呟いた。
「どうした、御主人」
クロはその言葉に反応して顔を晃に向けて来た。
「何か考えでもあるのかい？」
「いや、そのライフルだけれどね」
「ああ」
「どういったライフルかな。それによって違うんだけれど」
「散弾銃だったかな」
「散弾銃か」
それを聞いた晃の顔が微妙に変わった。
「まずいな」
「そんなにまずいのか」
「弾が広い範囲に飛び散るからね。すごく危ないよ」
「じゃあどうすれば」
「そうだね。まずはそれを何とかしないと」
彼は言った。
「向こう側の動物達にさ。こっちに寝返ってるのとかいるかな？」
「スパイかい？」
「うん。向こうがこっちのことを知ってればこっちにも紛れ込んでいる可能性もあるけれどね」
「それなら俺かな」
カナヘビが声をあげた。
「君がかい？」
「ああ、向こうにツレがいてな。そいつとの付き合いであっちにもちょこちょこ言ってるんだ」

「そうか。ならその散弾銃のある場所を調べておいて」
「それをどうするんだよ」
「それをまず押さえるんだ。そうすれば住職さんは銃を使えなくなる」
「ああ」
「後はこっちの方が数はずっと多いんだろ？作戦を立てれば勝てるよ」
「作戦！？」
「そうさ、まずはね」
晃は動物達に対して話をはじめた。そしてカナヘビからの話を聞いた後でまた動くことになったのであった。
後はそのカナヘビからの報告がやって来るのを待つだけである。クロは晃の部屋でそのことについて話をしていた。
「あれで本当にいいんだよな」
「多分ね」
晃はそれに答えた。
「銃を押さえたら。半分は成功したも一緒なんだ」
「カナヘビの情報待ちか」
「彼が無事なのが第一条件だけれど」
「ああ、それなら心配ねえよ」
クロはそれに関しては太鼓判を押した。
「あいつあれでもかなり素早いんだ、カナヘビの中でもな」
「そうなんだ」
「きっと上手くやってくれるぜ。まあ見てなって」
「うん」
そう話した時だった。ここでそのカナヘビが部屋にやって来た。
「ああ、ここにいたんだ」
「おっ」
「噂をすれば」
その当のカナヘビが出て来た。そして晃とクロの前に出て来た。

「探したよ、ちょっとね」
「それで首尾はどうだったんだい？」
クロが尋ねた。
「まあ帰って来たってことは上手くいったんだろうけど」
「ああ」
カナヘビはそれに応えて晃の学習机の側にまでやって来た。
「ちょっと紙とペン借りていいかな」
「ああいいよ」
晃はそれに頷いた。
「けど何に使うの？」
「何って」
カナヘビはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。
「紙とペンっていったら決まってるじゃないか」
「書けるの？」
「勿論」
彼は晃の問いに得意気に頷いた。
「人間の言葉も話せるしね」
「それとこれとは別なんじゃないかな」
「おいおい、何言ってるんだよ」
クロはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。
「俺達は脳味噌を食べたんだぜ」
「それは知ってるって」
「脳味噌を食べたらな、その能力が備わるんだ」
「ということは」
「そうさ、ものを書くことも出来るようになるんだよ」
クロは遂にそれを言った。
「俺だって書くことは出来るぜ、特にこいつはそれが上手いんだ」
「そうなの」
「まあ見てなって。見ればわかるからよ」
「うん」

晃はクロに言われるまま自分達の前にカナヘビが紙とペンを持って前に出て来るのを見守っていた。そしてカナヘビはそこでものを書きはじめた。
「これがな」
見れば地図を描いていた。描きながら説明をしてきた。
「住職さんのいる寺だ」
「うん」
見れば非常に詳しく書かれていた。玄関から庭、寺の中の間取図まで。二階、軒下についても描かれている。そして物置にマーキングがされた。
「銃はここにあったよ」
カナヘビはそのマーキングをした物置を指し示して言った。
「この中にね。あったよ」
「よし、そこか」
晃はそれを聞いて会心の声を出した。
「じゃあまずそこを押さえれば」
「いや、止めた方がいいね」
しかしカナヘビはこう言って彼を制止した。
「どうして？」
「あのさ、落ち着いて考えてみてね」
「うん」
「重要なものを置いておくとなると守りを固くするよね」
「まあね」
「住職さんだって同じだよ。それも相当ね」
「それじゃあ」
「そうさ、物置の周りには怖い奴等が一杯いるんだ」
カナヘビの声が剣呑なものになっていた。
「ドーベルマンやら毒蛇やら鷹やらがね。だから迂闊には近寄れないよ」
「まずいな、それは」

「そんなのが守っていたら手出しは出来ないだろ？だから迂闊なことは出来ないって」
「困ったなあ、どうすれば」
「何だよ、困ったのかよ」
「そう言われてもなあ」
クロの言葉にも本当に困った顔をして返すだけであった。
「それだと攻め込んでも守られてその間に住職さんが銃を持ち出すし」
「まあそうだろうね」
「一緒なんだよ。じゃあどうすれば」
「向こうの動物達が動かなければいいんだけれどね」
「けれどそんなの無理だぜ」
クロが言った。
「それこそ全員に眠り薬でも入れなきゃな」
「病院から失敬する？」
「いや、それはよくないよ」
晃はこう言ってカナヘビを制止した。

第五章

「それじゃあ泥棒だよ」
「けどよ、勝つ為にはそんなこと言っていられる場合じゃないぜ」
しかしクロはこう言ってそれに反論した。
「住職さんはこの町を自分のものにして脳味噌や内臓をもっと食おうとしてるんだぜ。そんなの相手にしなきゃならないってことはわかってるよな」
「わかってるよ。けど」
「けど。何だよ」
「やっぱり悪いことは」
言葉を濁していた。盗みが出来る程彼は手段を選ばない人間ではなかったのである。これは非常によいことだがこの場合は不利になることであった。
「じゃあ他のやり方を考えてくれよ」
クロは突き放したように言った。
「俺達は勝たなきゃいけないんだからな」
「わかってるよ、それは」
憮然とした声で返す。返しはしたがそれでもどうすればいいのかわかりはしなかった。その日は結局カナヘビから情報を聞いただけでそれ以上の進展はなかった。彼は学校に行きながらどうすればいいのか考えていた。
「どうしようかな」
学校に行っても考え続けていた。授業のことも頭にも耳にも入らずそのことばかり考えていた。
「どうにかしなくちゃいけないし」
考えてもどうにもなるものではなかった。とにかく閃きもなかった。考えも次第に煮詰まって来、彼自身もどうしたらよいのかわからなくなってきていた。あれこれ悩んでいるうちに給食の時間とな

り次には掃除の時間になった。晃の学校では給食の後昼休みとなり五時間目の前に掃除があるのである。
「じゃあ頼むぜ」
「ちぇっ、しょうがないな」
じゃんけんで負けて教室のゴミ捨てになった。ゴミ箱を持ったまま校舎の外にある焼却炉に向かった。
焼却炉ではもう煙突から煙が派手に出ていた。そこれゴミ捨て当番達が列を作って並んでいた。そしてそこに順番にゴミを放り込んでいた。
「おう、今日は御前かよ」
「はい」
焼却炉はサッカー部の先輩が当番としていた。そして放り込まれたゴミを鉄の棒で奥に押し込んでいた。焼却炉の中では火が派手に燃え盛っていた。
「早く入れな」
「わかりました。それじゃあ」
先輩に言われるままにゴミを焼却炉に入れる。ゴミはすぐに火の中に消えて派手に燃え盛った。
晃はそれを見ながらぼんやりとしていた。だがここで先輩が声をかけてきた。
「おい、入れ終わったんだろう」
「あっ、はい」
言われてはっと気付く。
「早く行け。後がつかえてるんだからな」
「わかりました。それじゃ」
先輩に言われてようやく我に返った。そして焼却炉から離れてそのまま教室に戻った。
「派手に燃えてたなあ」
晃はさっきまで見ていた火のことを思い出していた。
「それだけゴミが多いってことかな」

今日はとりわけ派手に燃えていた。だからこんなことも考えていた。
焼却炉の火のことを暫く考えていた。
「火か」
そう、火であった。ここで彼はあることに気付いた。
「待てよ」
はたと立ち止まり呟く。
「これで」
そして密かにある作戦を思い立った。家に帰ると早速その準備に取り掛かるのであった。
遂に作戦決行となった。その前日晃は動物達を集めてまずは家で作戦会議を開いた。
「まずはね」
寺とその周りの地図を開きながら言う。
「主力はこうして寺を遠回りに囲むんだ」
「その指揮は俺が執るんだな」
「ああ、頼むよ」
シェパードが名乗りをあげた。晃はそれに応えて頷く。
「そして問題はここなんだ」
寺の裏山を指し示した。
「ここを抑えたいんだ」
「そこに何かあるのかよ」
クロがここで問う。
「ほら、真下に住職さんのお寺があるのよね」
「ああ」
「ここから。あることをしようと考えてるんだ」
「あること？」
「そうさ、策があるんだ」
そう言ってニヤリと笑う。
「策がね。任せてよ」

「その策って何なんだよ」
「いいから。その時になってからのお楽しみ」
彼は言う。
「これで。かなりうちの勝率はあがるからね」
「それじゃあそっちには俺と御主人と僅かな数で行くか」
「俺はどっちに行けばいいんだ？」
「夕方に攻めるからね」
晃は応えた。
「まだ目の方は大丈夫だよね」
「ああ、まあな」
烏は答えた。鳥目を心配しているのだ。
「その時間だとな」
「よかった、それじゃあ君は裏山の部隊と主力の連絡を頼むよ」
「任せときな」
翼で胸をドン、と叩いて応えた。
「後は。明日の夕方だね」
「全面攻勢だな」
「本当は夜に仕掛けたかったんだけれど」
「俺達に気を使ってくれたんだな」
「うん。やっぱり君達の力も欠かせないから」
烏に対して言う。
「皆で攻めよう。そして住職さんをやっつけるんだ」
「おうよ」
戦いへの備えは整った。そして程なくしてその日になった。夕方になり晃達は家を出て住職さんの寺に向かった。
「こうして見ると無気味な寺だよな」
「そうだね」
寺が見えてきた。晃はクロの言葉に頷いた。そして寺を見据える。
古ぼけ、まるで廃墟の様であった。寺の庭には墓石やそとぼが立ち並び、何処からか烏や犬の鳴き声が聞こえて来る。それはまるで

三途の川の様であった。赤い太陽が寺と墓場を照らしている。夕陽は何処か血に似た色になっていた。
「化け物でも出てきそうだね」
「っていうか化け物を倒しに行くんだぜ、俺達は」
「住職さんをだね」
「まずは鉄砲を何とかしなくちゃな」
「そう、その為にもまず」
「作戦、見せてもらうぜ」
シェパードが率いる主力は寺の周りについた。そしてそこで烏の連絡を待つ。
「いいかい」
晃達はもう裏山に入っていた。彼はそこで烏に語り掛けていた。
「もう向こうに行っておいてね」
「もうかよ」
「うん。合図をするから」
晃は烏に対して囁く。
「その合図は？」
「爆発さ」
「爆発！？」
「うん、そうさ」
そう言って頷く。
「いいかい、爆発が起こったら彼等に伝えてね。すぐにお寺に飛び込めって」
「それだけでいいんだな？」
「それだけで充分だから。頼むよ」
「わかった。それじゃあそうするよ」
「うん、それじゃあね」
「ああ。じゃあな」
烏は飛び立ちシェパード達のところに向かった。そして晃はクロ達と共に裏山の頂上に着いた。そこからはお寺の全てが見渡せた。

「よし、思った通りだ」
彼はお寺を見下ろして呟いた。
「ここからなら。確実にやれるぞ」
「なあ御主人」
クロが彼に声をかけてきた。
「何？」
「ここから策を使うんだよな」
「そうだよ」
「一体どんな策なんだよ。確かに見晴らしはいいけれどさ」
「石でも投げ込むつもり？」
雀が尋ねた。
「そんなことしてもあまり効果はないわよ」
「石なんか投げないよ」
彼は不敵に笑ってこう応えた。
「じゃあ何をするのよ」
「もっといいものを使うのさ」
「それがこれ？」
晃が背中に背負うリュックを指差した。
「そう、これ」
応えながらそのリュックを下ろす。
「これを使うんだよ」
「さっきから気になってたけどそれ何なんだよ」
クロも問う。
「それが策ってやつみたいだけれど」
「まあ見てなって」
応えながらリュックを開ける。
「これを使って。ドカーーーーーーンとやるんだから」
「ドカーーーーーーンか」
「そうさ。まずはこれ」
最初に出したのはかんしゃく玉だった。

「これをね。こうするんだよ」
まとめて掴み、それを下に投げ込んだ。お寺の中でかんしゃく玉が炸裂する。
「そして次はこれ」
「それは？」
「鼠花火さ」
「僕がどうしたの！？」
「いや、これはそういう名前なんだよ」
鼠と聞いてキョトンとした顔になったハツカネズミに言った。
「これは。花火の一種なんだ」
「花火」
「そう、これが僕の作戦なんだ」
ここでニヤリと笑った。
「これで。勝ってみせるよ」
「ここから投げるだけで？」
「投げ込むだけで充分さ。ほら見て御覧」
鼠花火を投げ込む寸前でクロ達に対して下を指差しながら言う。
「かんしゃく玉を投げ込んだだけでもう大変な騒ぎになってるよね」
「確かに」
「急に火花が周りに出たからね」
「それが僕の狙いだったのさ」
誇らしげに言う。
「これが？」
「そうさ、これで向こうの動物達を驚かせて混乱させる。それが狙いだったんだ」
「じゃあその鼠花火もそうだね」
「そうさ、そしてこれだけじゃない」
鼠花火を寺の方に投げ込みながら言った。既に寺では鼠花火が派手に暴れ回り、動物達を混乱状態に陥れていた。
「まだあるのかよ」

「ああ、今度はこれさ」
次にはロケット花火を出して来た。時折鼠花火やカンシャク玉を投げ込みながらそれを地面に突き刺していく。
「これをね。こうするんだ」
そこに火を点けていく。そして点火した花火が寺の中に飛び込んで行く。これまでにない爆発が起こった。
「爆発・・・・・・」
それは烏も見ていた。今まではまだ爆発とは言えないものであったが今度は違っていた。完全な爆発であった。それを見て彼も動いた。
「今だぜ」
シェパードに声をかける。それまでただ花火の炸裂を呆然と眺めていたシェパードはそれを見て頷いた。
「よし、行こう」
「ああ」
烏もそれに応えて頷く。寺の周りを囲んでいた動物達が一斉に雪崩れ込んだ。

第六章

「よし、僕達も行こう」
彼等が雪崩れ込んだのを見て晃も言った。そしてクロ達に顔を向ける。
「いいね」
「ああ。それにしてもさ」
だがクロはここで気になったことを口にした。
「何でここで花火なんて出したのさ」
「火だよ」
「火！？」
「そうさ。ほら、動物は皆火を怖がるだろ？」
「ああ」
「だからさ。花火を持って来たんだ」
「それで住職さんのところにいる連中を混乱させる為だな」
「うん。かなり上手くいったみたいだね」
「そうだな。けれどこれで全部終わりってわけじゃねえぜ」
クロは下を見下ろしながら言った。
「大事なのは。これからだぜ」
「わかってるよ」
それは晃もわかっていた。その言葉に頷く。
「それじゃ今から一気に鉄砲のところまで行くよ」
「ああ。それじゃあ皆いいな」
「うん」
「もう準備はいいぜ」
そこにいる全ての動物達がそれに応えた。そして晃とクロの後ろについた。
「こっから一気に降りるけどよ、御主人」
クロは晃を見上げて言う。

「慌ててこけたりするんじゃねえぞ」
「わかってるよ。それじゃあ行こう」
「よし」
クロは頷いた。そして晃と彼の後ろにいる動物達も一気に裏山を駆け下りた。そしてそのまま銃が隠されている倉庫にまで向かった。
倉庫まで簡単に行くことが出来た。住職さんの寺にいた動物達は既に混乱状態にあり、そこにシェパード達の攻撃を受け、最早まともに動いてはいなかった。その為晃達もすんありと倉庫に向かうことが出来たのであった。
倉庫に辿り着くと犬達が扉に体当たりを仕掛けた。そしてそれで扉を無理矢理こじ開けた。
中に足を踏み入れる。そこには銃があった。
「よし、これだな」
まだ中学生の晃や動物達から見れば異様に大きな銃であった。黒光りし、禍々しい輝きを放っていた。晃はそれを見て思わず身震いした。
「これが住職さんの手に渡ったら大変なことになってたね」
「そうだな」
彼の傍らにはクロがいた。そしてその言葉に頷いた。
「そうなってたら俺達は全員」
「それじゃ今のうちに何とかしよう」
彼は言った。その足下をハツカネズミ達が通って行った。
「君達、迂闊に近付くと危ないと」
「いや、ここはこいつ等に任せよう」
晃は鼠達を気遣ってこう言った。しかしクロはそれを制止して彼等に任せるべきだと言った。
「どうしてだよ」
「銃を使い物にならなくする為さ」
クロは言った。
「銃はかなり細かい造りになってるだろ」

「うん」
晃は答えた。
「だからよ、そうしたものを潰すには連中みたいなのが最適なのさ」
「そうなんだ」
「まあ見てなって、すぐにわかるから」
クロがそう言うよりも早く鼠達は銃にかじりついていた。そして銃を瞬く間に傷だらけの無残な姿に変えてしまったのであった。これには正直晃も驚きを隠せなかった。
「えっ、もう」
「どうだ、俺の言った通りだろ」
「ああ、その通りだね」
これは素直に認めるしかなかった。
「まさかこんな簡単に」
「これで銃はなくなったな、何はともあれ」
「うん、それじゃ後は」
「住職さんだけだ。いいな」
「勿論」
晃は強い顔で応えた。
「それじゃあ今から行こうか」
「そうだな。用心しとけよ」
それに応じるクロの言葉もこれまでとはうって変わって真剣なものだった。
「住職さんは手強いぜ」
「悪人の脳味噌も。スポーツ選手の脳味噌も食べてるんだよね」
「それだけじゃない。今じゃ生き肝まで食べてる。それで力も半端なものじゃなくなってるんだ」
「鬼みたいだね」
「そう、鬼なんだよ」
クロは言った。
「今の住職さんは鬼さ。だから覚悟していけよ」

「わかったよ、それじゃあ」
既に寺にいる住職さんに従う動物達は皆何処かへ逃げ去ってしまっていた。そして晃の仲間の動物達は寺の本堂を取り囲んでいた。皆警戒し、唸り声さえあげていた。
「あそこに住職さんがいるんだ」
「すっげえ殺気がするだろ」
「そうかな」
「人間にはわからねえか」
クロは晃の素っ気ない返事を聞いて溜息をついた。
「これだけやばそうな気だってのに」
「殺気とかそんなのとは無縁の世界で生きてきたからね」
晃はそんなクロに対してこう言葉を返した。
「そう言われてもわからないよ」
「じゃあ仕方ねえな。とにかくだ」
「うん」
「今動いてるぜ、本堂の中でな」
「いよいよなんだね」
「そうさ、びびってションベンなんてちびるなよ」
「わかってるよ」
夕闇が次第に濃くなろうとしている。晃はその中でクロの言葉に頷いていた。
「怖いのは事実だけれどね」
「来たぜ」
本堂の扉がバリバリと鳴った。
「その鬼のご登場だ」
住職が姿を現わした。髪の毛一本もない頭にボロボロの法衣と袈裟を着ている。そしてその身体はまずでプロレスラーの様であった。
顔も若々しい。そこにいるのは晃が知っている住職さんではなかった。禍々しいまでに妖気を漂わせる一人の魔人であった。それが今晃と動物達の前に姿を現わしたのであった。

「誰かと思うたら」
住職はズシ、ズシという重い足取りで前に出て来た。
「獣達か。それに小童が一人」
口が開き、そこから彷徨の様な言葉が発せられる。その口にある歯はまるで牙の様に鋭く尖ったものになっていた。
「わしに何の用じゃ」
「それはもうわかってる筈です」
晃が住職に対して言った。
「住職さん、貴方を止める為に来ました」
「わしをか」
「そうです、貴方のとんでもない行動と計画を止めさせる為にここまで来ました」
「ではわしが脳や生き肝を喰ろうておるのを知っているな」
「はい」
晃は答えた。
「だからここまで来ました」
「そうか、では覚悟はよいな」
住職の身体から赤紫の気が放たれたように見えた。朧で、それでいて夕闇の中に蠢くそれはまさに妖気であった。人にあらざる者達だけが放つことのできる気、晃も今それを見た。
「まずいぜ、御主人」
クロが彼に言った。
「このままじゃあんたやられちまうぜ」
「けれどどうしたら」
「さっきの花火はまだあるかい？」
「花火？」
「最初に投げてたあの小さい玉でもいい。あるか？」
「残念だけれどないよ」
晃は答えた。
「そうか、じゃあ打つ手はなしだ」

クロの言葉は諦めたのか素っ気無いものであった。
「皆このまま住職さんにやられちまうぜ」
「困ったな、そりゃ」
「折角ここまでやったってのによ」
動物達はそれを聞いて残念そうに呟く。
「こんなことならさっさと倉庫にあった蜂蜜食っておくんだったぜ」
そこで狸が言った。
「おい、こんな時まで蜂蜜かよ」
それを聞いて狐が元々尖っていた口をさらに尖らす。
「そんなのだから太るんだろ」
「そういう御前だって油揚げには目がないだろ」
狸もムッとして言葉を返す。
「ったくよお。お互い様じゃねえか」
「お互い様だったらその蜂蜜山分けしな」
「食うのかよ」
「俺だって蜂蜜は好きなんだよ。いいだろ」
「あの住職さんから生き残れたらな」
「ヘッ、生き残れたら蜂の巣も紹介してやるよ」
「それ何処にあるんだよ」
「裏山によ、あるぜ。でっかいのがよ」
「裏山・・・・・・蜂蜜」
それを傍目で聞いていた晃の心にまたあることが閃いた。
「それだ、それだよ」
「どうしたんだよ、一体」
「逃げても間に合いそうにないぜ」
「違うって。住職さんをどうにかする方法を見つけたんだよ」
晃は明るい声でクロと烏に返した。
「誰でもいい、倉庫からその蜂蜜を持って来て」
「あ、ああ」
動物達のうち何匹かが晃の言うままに倉庫に向かった。そして蜂

蜜が入った壺を持って来た。
「持って来たぜ」
「これをどうするんだ？」
「最後のお楽しみってわけじゃないだろう？」
「そんな筈はないさ」
晃はその壺を受け取って会心の笑みを浮かべていた。

第七章

「この壺をね」
「ああ」
「こうするんだよ！」
そう言いながら壺を放り投げた。そして住職に投げつけた。
「ヌッ！？」
住職はその壺を拳で叩き潰したがその中まではそうはいかなかった。蜂蜜を全身に浴びてしまったのだ。
「これは・・・・・・蜂蜜か」
「そうさ」
晃は住職に答えた。
「紛れもなくね」
「あ～～～～あ」
「勿体無いなあ」
狸と狐はそれを見て残念そうに言う。
「折角食べようと思ったのに」
「悪いけどそれは生き残ってから言って」
晃はそんな二匹に言葉を返した。
「生き残ってないとそもそも蜂蜜どころじゃないからね」
「それはどうだけれど」
「お楽しみが」
「フン、確かに鬱陶しいが」
住職は身体にまとわりつく蜂蜜を眺めながらも平然としていた。
「これがどうしたというのじゃ。こんなものでわしを倒せると思ったか」
「確かにそれだけじゃ倒せないだろうね」
だが晃もまた平然としていた。さっきまでとはうって変わった落ち着いた顔でこう言い返す。

「それだけじゃね」
「どういうつもりじゃ」
「それはすぐにわかるよ」
彼は言った。
「すぐにね」
「何のことかわからぬが」
住職はまた前に出て来た。
「覚悟は出来ておろうな。念仏は唱えてやるから感謝せい」
「そうだったね、ここはお寺だったんだ」
「それがどうしたのじゃ」
「だったら誰かが死んでも困らないんだ」
「今更何を言うておる」
住職は晃のその先程までとは全く違った余裕さえ見られる様子に軽い苛立ちを覚えた。
「大人しくしておれ。一瞬で済むからな」
「おい、逃げろ！」
その時だった。上空から鳥達の声がした。
「皆逃げろ！大変なことになったぞ！」
「どうしたんだよ！」
「来たな」
動物達はそれを聞いて騒ぎだす。だが晃だけは至って冷静であった。
「皆、急いで住職さんから離れるんだ！」
「何だよ、急に」
クロもそれを聞いて怪訝そうな顔になる。
「何が起こるっていうんだよ」
「すぐにわかるよ。早く逃げて」
「あ、ああ」
クロも晃の言うままに逃げた。皆住職から一斉に去る。空と陸で。
そして住職と裏山までの道がまるでモーゼのエジプト脱出の時の紅

海の様に二つに割れた。
「ヌウッ！？」
「よし！」
住職と晃は同時に声をあげた。だが住職のそれが呻き声に近いものであったのに対して晃のそれは会心の声であった。その声こそがそのまま二人の運命を語っていた。
黒いものが裏山から飛んで来る。それはまるで風の様に飛び住職に向かって行く。住職はそれから避ける間もなかった。そしてそのままその黒いものに覆われてしまった。
「グ、グワアアアアアアーーーーーーッ！」
「よし、やったぞ！」
黒い霧に囲まれてもがき苦しむ住職を見て思わずガッツポーズをした。晃は自身の考えが見事に的中したことをこの時確信していた。
「上手くいったな」
「なあ、一体何なんだよ、あれ」
傍らにいるクロが彼に問う。
「裏山からいきなり出て来たけれどよ」
「蜂だよ」
「蜂！？」
「そうさ、その証拠に羽音が聞こえるだろう？」
「ああ」
クロは頷いた。確かに蜂のあの羽音が五月蝿いまでに聞こえてきていた。
「倉庫に蜂蜜があるって聞いたのと裏山に蜂の巣があるって話でね。それで思いついたんだ」
「そうだったのか」
「上手くいけばいいなって思っていたけれど見事に上手くいったね」
「もう少し時間が遅けりゃわからなかったな」
「そうだね」
もうすぐ夜になろうとしていた。昼の虫である蜂の時間は間も無

く終わろうとしているのだ。時間的にもギリギリの賭けであったのだ。
「本当に。イチかバチかだったんだよ」
「若し蜂が来なかったらどうするつもりだったんだよ」
クロは問う。
「都合よく蜜に誘われてわんさと来たからよかったけれどよ」
「その時はどうしようもなかっただろうね」
彼は言った。
「やられるだけだったさ」
「またえらく吹っ切れてるな」
「そうかな」
「これが成功しなかったら。マジでやばかったんだぜ」
「まあ結果オーライってことで」
晃の声は明るかった。
「それで許してよ」
「まっ、それでいいか」
クロもそれで納得することにした。
「とりあえずこれで住職さんは終わりだろうし」
「蜂の毒ってマムシの毒より怖いんだよね」
「考えようによってはな」
その言葉に当のマムシが答えた。
「俺の毒より怖いな。ショック症状があったりするから」
「そうなんだ」
「首とか頭をやられるとな。特にまずいんだ」
「あれだけの蜂にやられてたら？」
「個人差はあるだろうがかなりやばいな」
マムシは言う。
「もう助からないな、あれは」
「そうなの」
「これで街の平和は守られたってわけだな」

「そうだね」
蜂は何時までも住職の身体を覆っていた。それは住職が倒れても続いていた。最早動かなくなり、そこに伏していてもだ。彼等は執拗に攻撃を続けていた。そして晃達はそれを見守っていたのであった。
それから数日後蜂に刺された住職さんの遺体が発見された。それは腐敗しているうえに身体中蜂の刺し後がありかなり無残なものだったという。だが警察はそれを事故として扱った。傍目には確かに不可思議だがそうだとしか思えない状況だったからだ。住職さんは蜂蜜を頭から被ってそれに誘われた蜂によって死ぬという実に奇妙な最期を遂げたということになった。事の真相を知っているのは晃と動物達だけであった。
「事故で終わっちまったらしいな」
「まあそうだろうね」
晃は住職さんが住んでいたお寺の前でクロと話をしていた。そこではお葬式が行われていた。
「誰も。あんな話信じたりしないよ」
「それもそうか」
「住職さんが脳味噌やら内臓やら食べて力をつけていたってことも」
「そして街を自分のものにしようとしてたってこともな。誰も信じないか」
「あの最期もね。だって僕だって最初は信じられなかったんだから」
「俺が人間の言葉を話すことか？」
「そうさ。本当に耳を疑ったよ」
「まあそうだろうな」
「そうだろうな、じゃなくてさ。今でも普通にしゃべってるし」
「気にしない気にしない」
「僕はいいけれど他の皆の前では話さないようにしてね」
そう言って釘を刺す。
「さもないと大騒ぎになるよ」

「ちぇっ、面白くないなあ」
クロはそう言われて口を尖らせた。
「折角の人を驚かせる楽しみが」
「猫ってそんなことしか考えられないの？」
「悪戯をするのが猫の仕事なんだよ」
それに対するクロの返事である。
「それをわかっていないのは困りものだぜ」
「僕は別に困らないよ」
晃はこう返した。
「少なくとも人間はね」
「わかったよ。じゃあ黙っておいてやるよ」
憮然とした様子で言う。
「御主人に言われちゃ仕方ないからな」
「けれどそれは君だけじゃないよ」
「えっ！？」
「他の動物も。いいね」
「厳しいなあ、それって」
「さもないとまた騒ぎになるだろ。そうなったら君達にとってもよくないよ」
「わかったよ、じゃあ皆にも伝えておくよ」
「絶対にね。それでもうあんな事件のことは忘れよう」
彼はお葬式の黒と白の垂れ幕を見ながら言った。
「住職さんだって。最初は人間だったんだ」
「いい人だったらしいな」
「僕が小さい頃はね。真面目で優しい人だったんだよ」
「それがどうしてああなっちまったんだろうな」
「人は変わるって言われてるよね」
「ああ」
「それじゃないかな。よく変わる場合もあれば悪く変わる場合もある」

「住職さんは悪く変わっちまったってことか」
「多分ね。それじゃ家に帰ろうか」
「ああ。帰ったらどうするんだ？」
「まず君の餌からだね。何がいい？」
「脳味噌を」
「・・・・・・冗談じゃなかったら酷いよ」
「冗談だって。魚のキャットフードでいいよ」
「君あれ好きだね」
「人間には人間の、猫には猫の食べ物があるだろ」
「うん」
「そういうことさ。俺だって他の仲間達だって本当は脳味噌なんて食べたくなかったのさ」
「そうだったの」
「住職さんの実験に使われたけれどな。御主人だって普通はそんなもの食いたくはないだろ？」
「モツは好きだけれどね」
だがモツと人間の脳味噌や内臓は違う。また別のものである。
「な？あんなの食える奴なんてさ」
「奴なんてさ」
「化け物だったんだよ。住職さんも人間から化け物になっちまっていたのさ」
「そういうふうに変わっていたんだ」
「御主人のさっきの言葉の通りだったらな。結局住職さんはああなるしかなかったんだ」
「そうだったんだ」
「だから別に人を殺したとかそんなふうに考える必要はないぜ。若し思ってたら、だけれどな」
「別にそうは思ってないよ」
「それじゃあそれでいいさ。じゃあ早く帰ろうぜ」
「うん」

晃は頷いた。
「早く帰って。キャットフードくれよ」
「ミルクもつけようかい？」
「ああ、頼むぜ」
晃とクロはそんな話をしながらお寺の前から去り、自分達の家へと帰って行った。その後ろでは温厚そうな顔をしたかっての住職さんの遺影が飾られ、そこで葬式が行われていた。そこにいるのは人間としての住職さんであった。そして晃とクロはその住職さんに今別れも告げていたのであった。
それからこの街で人の言葉を話す動物達の姿も噂もなくなった。だがそのことと住職さんの死が関係あるのだと考える者は一人もいなかった。だが事実を知っている者達はいた。しかしそれは決して表には出ないものであった。事の真相は話さない筈の動物達が知っているだけであった。

晃とクロ　～動物達の戦い～　　完

２００６・３・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3271f/

晃とクロ　～動物達の戦い～

2010年10月8日15時02分発行